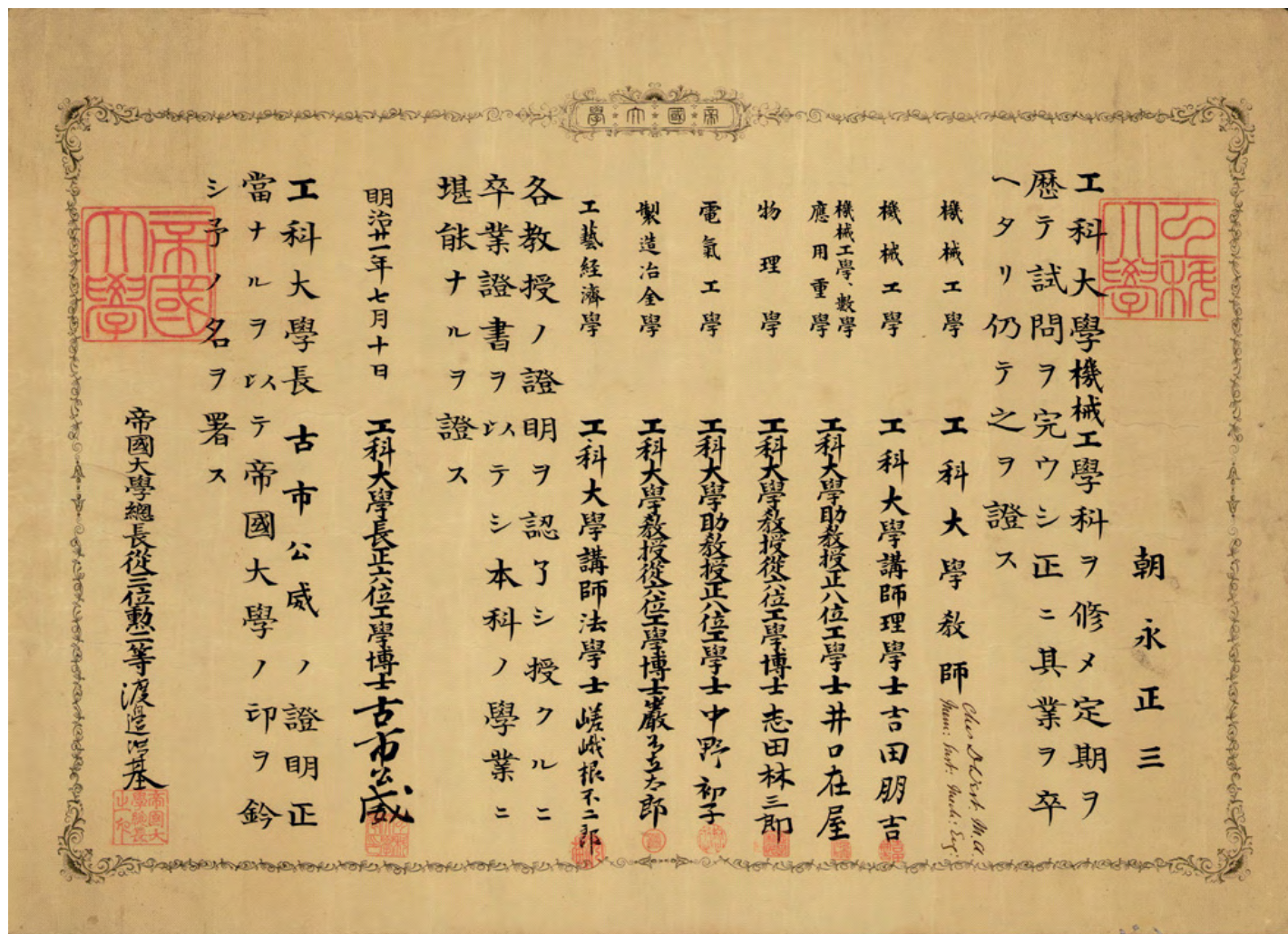




朝永正三先生と佐瀬武雄さんの卒業證書 (日本の高等教育史の貴重資料)

牧野俊郎 (S47, 京都大学)

平成 19(2007)年 12 月 19 日, 5 年前にご退官になった藤尾博重先生(S38 卒)から物理系図書室には朝永先生の卒業證書があるはずだとのお話をいただいた。藤尾先生は, 図書室の引越のときにそれを見たときと仰るのである。一緒に図書室に向かい, そして, 地下 1 階書庫の階段の下に, 紙に包んで丸めて置いてあったその證書を発見した。その隣に同様の状態のもう 1 つの卒業證書も発見した。



朝永正三 帝國大學工科大学卒業證書(明治 21 年 7 月 10 日)

それは、発見したというより、発掘されたという感じであった。発掘されたのは、朝永正三先生の帝國大學工科大学卒業證書(明治21年7月10日)と佐瀬武雄さんの京都帝國大學理工科大学卒業證書(大正2年1月27日)であった。證書を包んだ紙はどちらも、鑑定するまでもなく平成の紙であった。

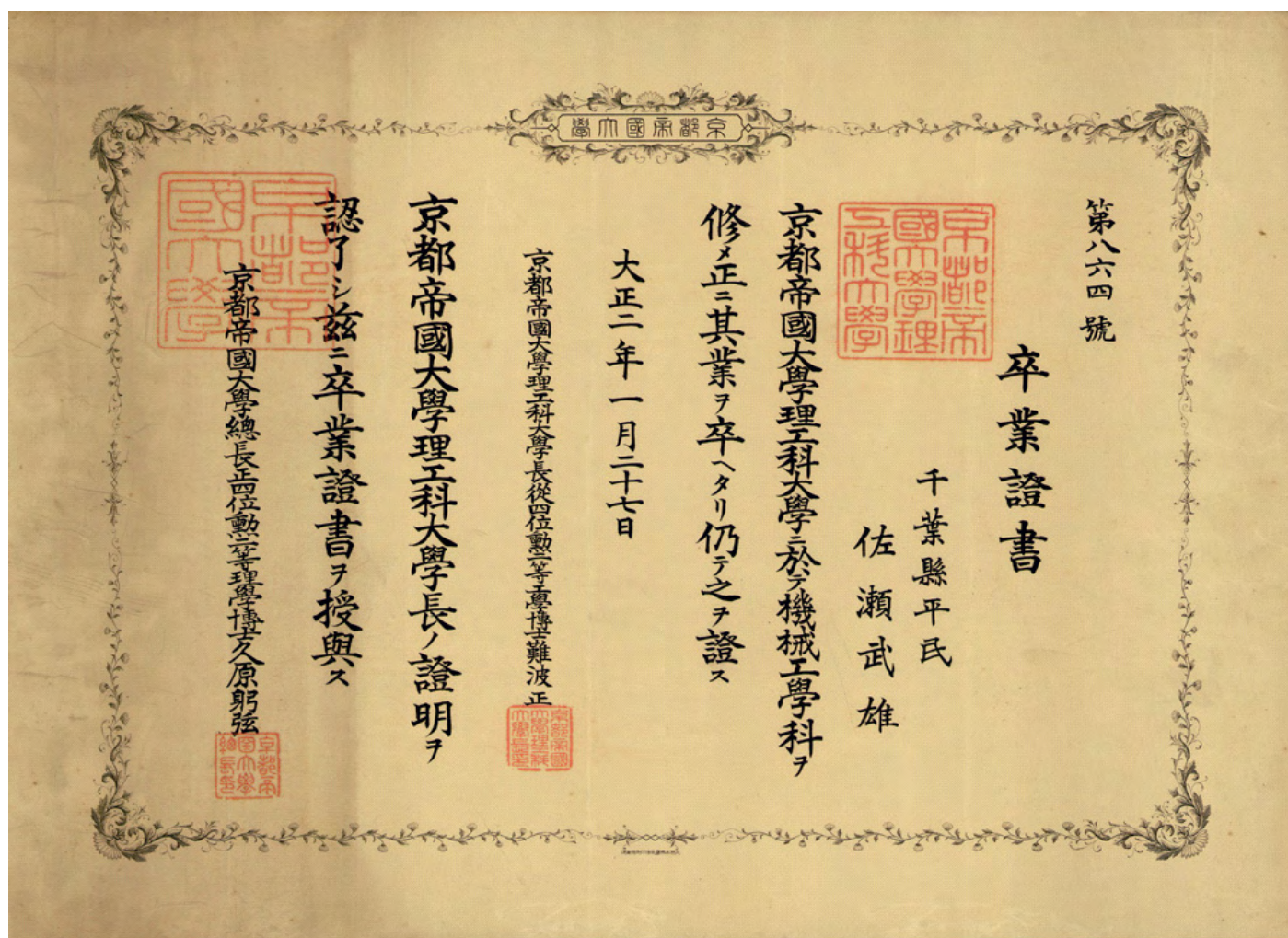
藤尾先生の仰った「引越」は平成になって2度あった機械系図書室 / 物理系図書室の引越を指すのであろう。しかし、2つの證書は、その前に、明治・大正・昭和・平成の長い年月を、機械工学科の旧本館から工学部2号館、そして工学部物理系校舎のどこかを、人知れず経て時代を生き抜いてきた。2つの證書の保存状態はすぐれてよい。私は、多分に高揚していた。高揚のなかで、すぐに大学文書館に連絡を取り、その日のうちに、このわが国高等教育史上超一級の資料の処遇を決めた。

朝永正三先生(1866-1942)は、慶應元年(陰暦)12月15日(1866年1月下旬)、肥前にお生まれになった。明治政府の工部省が明治10(1877)年に設立した工部大學校に入学し、機械工學を専攻された。同校が司法省の法學校とともに東京大學と合併しその1年後の明治19(1886)年にできた帝國大學の工科大学を、明治21(1888)年に卒業された。その後、特許局審査官を務められたが、京都帝國大學設置前年の明治29(1896)年に教官予定者としてドイツ・イギリスに留学された。京都帝國大學は明治30(1897)年に設置され、その年に理工科大学の機械工學科と土木工學科が開設された。朝永先生ご卒業の帝國大學は、その際、東京帝國大學と改称された。先生は、帰国後の明治31(1898)年に京都帝國大學理工科大学機械工學科の初代教授に就任して、機械工學第一・第三講座の擔任となり、主に熱機關學を講じられた。大正4(1915)年の「京都帝國大學機械工學會々員名簿」には、先生は、工學博士 工學士 京都帝國大學工科大学教授 であり、京都市廣小路通寺町東入にお住まいであるとある。電話をおもちで、その番号は上京の1123番であったようである。先生は、大正15(1926)年1月、想像するに、60歳の還暦の日の前日にご退官になった。

昭和63(1988)年に朝永正三先生ご令孫の朝永峰子さまから機械系工学教室に、先生の工部大學校時代の厚さ1cmのノート66冊等のご寄贈があった。それは、当時の機械工學の高等教育の最先端を記録する超一級の資料である。教室は、将来のキャンパス移転・専攻改組にともなってその貴重資料が散逸することを案じて、平成17(2005)年これを大学文書館に寄贈しその管理を依頼した。教室は管理換に際して朝永峰子さまに連絡を試みたが果たせなかった。正三先生の弟君 三十郎先生(西洋哲学史)のご子息 振一郎先生(物理学)のご遺族には連絡可能であると思われたが、それは控えた。

このたび発掘の證書は、643 × 466 mm と大きい。個別科目の認定が擔當教官の署名・印とともに卒業證書に現れる。工部大學校・東京大學の時代から帝國大學の時代になって外國人教師が数でわずか 1/7 になっている。助教授・講師が多い。工學士が重要な位であるとわかると同時に、2 人の助教授が正八位に叙されているのはおもしろい。彼らは陸海軍の尉官クラスに擬されていたのかもしれない。證書で電氣工學を認定している中野初子助教授は、なかのはつねとお読みする男子で、しかし子年のお生まれではない。後に電氣學會會長をお務めになった方である。この證書には「卒業證書」と頭書されていないが、「卒業證書」の文字は工科大學長の証明文に現れる。当時の帝國大學卒業は7月であったようである。證書の発行者である初代の帝國大學總長渡邊洪基は、學問の府を官吏養成所にしたとして評判のよろしくない人物であるが、勲二等とある。京都帝國大學の機械工學科第2代教授の大塚要先生・第3代教授の松村鶴蔵先生は、教室に残るお写真で勲一等の大綬を佩びておられる。時代の推移もあるのであろうが おもしろい。

卒業證書は個人に与えられるものである。なぜ、個人に与えられた証書が階段の下にあったのか。想像するに、当時卒業証明書の類のものはなく、朝永先生は



佐瀨武雄 京都帝國大學理工科大學卒業證書(大正2年1月27日)

職に就くにあたって戸籍謄本とともに卒業証書そのものを京都にお持ちになった。その後、先生には、そのようなものは どうでもよい いくつかの証書の一つとなり、先生にも それを預かることになってしまった大学でも その存在は忘れられた。1世紀余のときを経て、お節介な後輩が図らずもそれを見つけてしまった、そういうことであったのかと思う。

京都帝國大學は明治30(1897)年に設置されたが、最初に開設された理工科大學は大正3(1914)年に至って工科大學と理科大學に分離された。その後、大正8(1919)年に工科大學は工學部と改称された。京都帝國大學理工科大學の組織が続いたのは、創設期の17年間であった。

佐瀬武雄さんの理工科大學最後期の大正2(1913)年1月の卒業証書には、第864號という番号がある。証書の発行者は京都帝國大學總長であるので、その番号は明治33(1900)年に京都帝國大學が第1回の卒業者を出して以来の卒業者の数に対応するのであろう。明治33(1900)年の第1回の機械工學科の卒業者は11名であった。その後、機械工學科では大正元(1912)年までに計220名が卒業、大正2(1913)年には佐瀬さんを含む20名が卒業している。機械工學科の卒業者が京都帝國大學卒業者に占める割合は、この分科大學の時代には かくも大きかった。

佐瀬さんは、ご卒業2年後の大正4(1915)年の「京都帝國大學機械工學會々員名簿」によれば、勤務先：南滿州鐵道會社、連絡先：青島山東鐵道とあり、昭和19(1944)年の「京都帝國大學機械工學會會員名簿」によれば、勤務先：朝鮮無煙炭株式會社、連絡先：平壤府新里町90とある。<http://ci.nii.ac.jp/naid/110004412953/en/>には、昭和4年朝鮮總督府鐵道局燃料調査室発行の佐瀬さんの著書「煉炭物語」の紹介がある。京都大学機械系工学会にご逝去の記録はない。

佐瀬さんの卒業証書は、われわれが目にするのできる京都帝國大學理工科大學の唯一の卒業証書であるであろう。その様式は現在の卒業証書のそれに近い。近いがゆえに違いを比較したくなった。佐瀬さんのものと、手もとにある私と私の長男のものを見て。下の表を作った。漢字は注意深くタイプした。より細かく見ると、昭和47(1972)年の私の証書における「京都大学」の「京」の口部にはまん中に横棒が走って口は日になっている。下表には再現できなかったが、「都」の偏の日部の左肩には「、」が付いている。証書の番号の変遷・証書の大きさの変遷は、世における大学の、さまざまの意味での変遷を示唆しているかに見える。

卒業証書の変遷

番号	第 864 号	第 10972 号	工第 39714 号
頭書	卒業証書	合格証書	学位記
氏名	千葉縣平民 佐瀬武雄	福井縣 牧野俊郎	牧野研造
発行年	大正 2(1913)年	昭和 47(1972)年	平成 15(2003)年
証明者	理工科大學長	工學部長	工学部長
発行者	京都帝國大學總長	京都大學總長	京都大学總長
大きさ	548 × 400 mm	545 × 404 mm	531 × 386 mm

そもそも、卒業証書は個人に属すべきものであるが、私は、上述の朝永ノートのとおりと同様に、最低限以上に朝永家に迫ることなく、また佐瀬家をお調べすることなく、これらの証書を大学文書館に寄贈した。これらの証書は日本の高等教育史における最高級の資料となり、京都大学がつづく限り生きつづけるであろう。

この後、これらの証書は、マイクロフィルム保存のための撮影・データ登録作業などを経て、時計台東翼北側1階の大学文書館貴重書庫に保管され一般に閲覧できる状態になるが、いまのところは、まだ大学文書館の受付を通して閲覧可能な状態にはない。閲覧のご希望は、私（京機会 牧野俊郎宛）にお申し出下さい。

—— 京機短信への寄稿、宜しくお願ひ申し上げます ——

【要領】

宛先は京機會の e-mail: jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。

宜しくお願ひ致します。